

南アルプス市立小笠原小学校 第一回自己評価書

令和5年8月17日作成

校長： 佐野 紳二	記述者・職名： 深澤 鉄也・教頭
<p>学校教育目標</p> <p>校 訓「あかるく かしこく たくましく」 教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成 具体目標 ①労をいとわず働く子 ②自分を明るく表現できる子 ③進んで学ぼうとする子 ④思いやりがあり、礼儀正しい子 ⑤健康でたくましい子</p>	
<p>本年度の学校経営方針と理念</p> <p>「喜んで登校し、満足して下校できる」明日が待たれる学校の創造 (1)安全・安心な学校づくりの推進 (2)教育の不易と流行の見定めと率先垂範による教育の推進 (3)研究研修活動を活性化し、主体的・対話的な授業づくりの推進 (4)楡形中学校区小中一貫教育に取り組み、地域が一体となった教育の推進 (5)学校評価システムによる学校経営の推進</p> <p>学校経営目標・具体的な取り組み</p> <p>「持続可能な社会」の創り手を育成する＝「一人も置き去りにしない教育」の実現 スマイル「笑顔あふれる楽しい学校」の創造</p> <p>①挑戦 Let's Try 失敗を恐れず、まずはやってみよう ◇子どもが主体的に参加し、楽しさを感じ、わかったと実感できる授業づくり</p> <p>②協力 Together 「仲間といっしょ」が楽しい ◇小笠原流礼法の極意である「相手を大切に思う心」を「自然に表現できる」子どもの育成。 ◇学校教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成の意識化、共有化、日常化</p> <p>③全力 Do your best 「いっしょうけんめい」やると楽しい ◇基本的な生活習慣の確立、自己管理能力の育成</p>	
I 評価方法	
<p>児童、教職員の2者に対して、アンケート用紙により回答を得た。質問に対しての回答選択肢は基本的に4段階になっている。</p> <p>A：とても・よく～している B：だいたい～している C：あまり～していない D：～していない</p> <p>の4段階で、このうちAとBは肯定的なプラス評価であり、CとDは否定的なマイナス評価である。AとBのどちらを選ぶか、CとDのどちらを選ぶかについては、回答者の判断材料の有無・性格・回答時点の状況等も関係するため、A・B・C・Dを厳密に区別して集計することよりも、A・B合わせてのプラス傾向、C・D合わせてのマイナス傾向として集計する方が、全体的な傾向をつかみやすくなる。</p> <p>そこで、A・B・C・Dの選択肢を点数化し、A=4、B=3、C=2、D=1として集計し、回答者数で割って平均点数をもとめた。平均点数は次のような意味をもつ。</p> <p>○全体にプラス評価（A・B）が多ければ、平均点は2.5点以上になり、4点に近づいていく。 ○全体にマイナス評価（C・D）が多ければ、平均点は2.5未満になり、1点に近づいていく。</p> <p>なお、児童のアンケートには回答の選択肢として E：わからない があるが、これは点数には含めていない。</p>	

Ⅱ 全体評価

○教職員の自己評価、児童アンケート、それぞれの集計結果を見ると、いずれも昨年度と同様で、肯定的な評価の値が高い結果となった。

(一昨年度から学校評価の評価項目を見直し、回答方法も Google form を使って web 上で回答する形式に変更した。評価項目及び回答方法は楡形地区で概ね統一した。)

- ・教職員の自己評価の結果は、21の質問項目に対し、20の項目で評価の平均が3.0を上回る高い評価結果であった。
- ・児童アンケートの結果は、20の質問項目のうち、平均点数化できる16の項目に対し、15の項目で評価の平均が3.0以上のプラス評価だった。

以上のことから、小笠原小学校では学校経営方針に基づき、教育目標の実現に向けて、一人一人の教職員それぞれが職務を遂行してきたことにより、教育活動全般にわたって適切な指導が行われ、そのことが児童に肯定的に評価されていると考えられる。従って、本校の学校評価に係る総合的な評価は概ね良好な水準にあると言える。

しかしながら、一つ一つの結果に目を向けてみると、マイナス評価の項目や、プラス評価ではあるがポイントが低い項目が各調査で見られる。また、評価の分散が大きい(C、D評価=マイナス評価が多い)項目についても課題があると考えられる。教職員、児童のそれぞれの調査について、以下の「Ⅲ アンケートごとの評価」で考察し、課題を明らかにしていきたい。

Ⅲ アンケートごとの評価

教職員の自己評価アンケートについて

教職員の回答項目中には、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価の項目はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目(平均ポイントが3.1未満の項目)は「17」「18」の2つだった。

- | | |
|--|------|
| 17「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」(保護者・地域との連携) | 2.93 |
| 18「あなたは、教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか。」 | 3.06 |

また、評価の分散が大きい(C、D評価=マイナス評価が多い)項目は「6」「8」「9」「17」「18」の6つだった。

- | | |
|--|-----------|
| 6「あなたは、校内研に主体的に関わっていますか。」 | C評価…14.3% |
| 8「あなたは、教材・教具(ICT機器を含む)効果的に活用する授業を行っていますか。」 | C評価…10.5% |
| 9「あなたは、児童・生徒が積極的に読書活動に取り組むよう指導していますか。」 | C評価…15.0% |
| 17「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」 | D評価…21.4% |

【考察・改善策】

6「あなたは、校内研に主体的に関わっていますか。」と8「あなたは、教材・教具(ICT機器を含む)効果的に活用する授業を行っていますか。」の項目では、C評価の割合が大きかった。その原因としては、1学期の校内研では、研究方針・内容・方法等に関する提案・討議等の研究の土台作りが行われたり、各学年の研究授業づくりに向けての話し合いが初期段階だったりしたため、①研究内容の理解が不十分だった。②日常の授業に生かす「余裕がなかった。」or「意識が高まらなかった。」教職員が少なくなかったためだと考えられる。今後の校内研究の深まりや、学年・ブロックでの分担・

取り組みの中で、全教職員が校内研を「自分事」として捉え実践することで授業の学びの質を高め、一人一人の子どもたちの可能性を伸ばしていきたい。

9「あなたは、児童・生徒が積極的に読書活動に取り組むよう指導していますか。」の項目にC評価の割合が大きいことについては、①教職員の読書活動への意識の低さ。②読書活動に取り組む時間的余裕のなさ。が原因だと考えられる。現代の子どもたちに求められている学力のひとつは「大量な情報の中から自分に必要な情報を読み解き、取捨選択する能力」であると考えられている。読書活動は、その能力を子どもたちに育むための「語彙力を向上」させ、「読解力を高め」、「長文に向き合う力を高める」と言われている。読書活動においては、子どもと本との橋渡しをする教職員の役割が極めて大切であり、教職員の読書指導の質が子どもの読書意欲の高まりを左右する。まずは私たち自身が主体的に読書をし、子どもたちが本好きになるような読書活動を推進していきたい。

17「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」の項目が低い評価になっていることについては、学校全体としてみた場合、決して情報発信ができていないわけではないので、改善策は必要ないとする。この項目の質問自体を「あなたは」ではなく「あなたの学校は」と考えればよいのではないかと。

18「あなたは、教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか。」の項目が低い評価になっていることについては、「B：だいたい～している」と回答した割合が非常に多い（77.8%）ことが原因の一つである。また、記述欄にもあるが2学期以降に活用を予定している学年があることも原因の一つと考えられる。学校農園については、今年度から農業ボランティアが不在になったことで管理が大変になっているので、①農園を縮小する。②新たに農業ボランティアを募る。③農園を使用せず学校の敷地内での活動に移行する。等が考えられる。2学期に検討し来年度の方向性を決めたい。

学校・家庭・地域が、よりよい学校教育を通じてよりよい地域を創るという目標を共有し、連携・協働する体制づくりの推進は、今後さらに重要になる。各教科等において体験活動の重要性を認識し、地域の人材や施設を活用した自然体験や社会体験、社会奉仕活動、地域の人々との交流活動等、体験を重視した発達段階に応じた系統的な教育を積極的に推進したい。

児童アンケートについて

児童の回答項目中には、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価の項目はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目（平均ポイントが3.25未満の項目）が次の5つだった。

6「わたしは、無言清掃をしている。」（豊かな心）	3.13
8「わたしは、家の人に学校のようすを話している。」（豊かな心）	3.05
11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」（確かな学力）	2.93
13「わたしは、本を読んでいる。」（豊かな心）	2.97
15「わたしは、早寝早起きをしている。」（健やかな体）	3.12

また、評価の分散が大きい（C、D評価＝マイナス評価が多い）項目は「8」「11」「13」の3つだった。

8「わたしは、家の人に学校のようすを話している。」（豊かな心）	C評価…18.8%	D評価…8.3%
11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」（確かな学力）	C評価…23.9%	D評価…5.7%
13「わたしは、本を読んでいる。」（豊かな心）	C評価…22.2%	D評価…7.1%

【考察・改善策】

6「わたしは、無言清掃をしている。」の項目については、①無言清掃に対する児童一人一人の捉え方が違う。②無言清掃についての意識が低い。という原因が考えられる。①については、実際の清掃場面での児童の様子を見てみると、清掃に必要な話をしているのに「無言清掃でしょ。」と注意を促す場面も見受けられる。②については、無言清掃をするという意識がまだ不十分なために、清掃に関係のない話をしてしまったり、清掃自体にも真剣に取り組めなかったりする児童がいると考えられる。児童の規範意識を育て

る上でも、この結果を真摯に捉え、「小笠原スタンダード」を通して具体的に望ましい態度を伝える等、今後の児童への指導に活かしていきたい。

8「わたしは、家の人に学校のような話を話している。」や15「わたしは、早寝早起きをしている。」の項目については、家庭での生活時間帯の変化も原因の一つと考えられる。家庭でゆっくりと学校の様子を話す時間が取れない家庭も少なくないだろう。そんな中で、学校の様子をホームページやおたよりでお知らせしたり、連絡帳や電話連絡で保護者との連絡を密にしたりすることで、それをきっかけに家庭での会話が生まれ、学校への理解にもつながったりするのではないかと考えた。また、児童の健康管理については保健日よりや学年日よりなどを通して、繰り返し家庭への呼びかけを行ってきた。引き続き啓発活動に力を入れ、保護者の協力を得る中で、児童の健康管理にも取り組んでいきたい。

11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」の項目は、昨年度、一昨年度の児童のアンケートの中でも最も平均点数の低かった項目である。児童が自分の考えを伝えるには、まずは小集団の中で自分の考えを発信する経験を重ねていくことで評価の改善を図っていくことができると考える。昨年度まで新型コロナウイルス感染症拡大防止のために少なくしてきた授業中の対話的な学び（ペアや小集団での学び合い活動）を、授業の中に取り入れたり、児童に関わりのスキルやコツを身に付けさせるために取り組んでいる「あやめっ子タイム」を継続したりすることで、児童の発言を促していきたい。また、「あやめっ子タイム」の取り組みの効果として、共感的な人間関係を育み児童の自尊感情を高めることも期待できる。「あやめっ子タイム」に取り組んでいくことで、「困ったときに相談できる友達」づくりを進めていくこともできるだろう。

13「わたしは、本を読んでいる。」については、朝読書の時間の確保だけでなく、授業時間を利用しての図書室の利用等、読書の機会を確保するとともに、図書日よりやおすすめの本の紹介など様々な取り組みが行われている。今後も、これまでの取り組みを継続しつつ、児童が興味を持てるような読書活動を取り入れながら本に触れる機会を増やしていくことで、「本が好きの子」を増やし、読書に親しむ態度を育てていけるのではないかと考える。

Ⅳ ま と め

アンケート調査の結果から、本校の教職員は学校長の示す学校経営理念と方針、学校経営目標を、日常の職務を遂行するための行動指針（具体的な目標）として意識し、日々の業務に使命感と責任を持って取り組んでいると考えられる。また、そうした教職員の姿勢が、児童が楽しく、充実した学校生活を送ることができることにつながっていると考えられる。

児童アンケートの結果を見ると、安定した学校運営がなされており、そのことが児童に評価されていると考えられる。しかしながら、児童アンケートの結果において評価の低かった項目は、家庭学習の充実、早寝早起きなどの家庭での生活改善、困ったことを解決するためのピア・サポート体制の充実など、昨年度までの学校評価からも、長い間課題となっている項目であることがわかる。これらの課題解決に向けては、啓発活動や様々な機関との連携などの継続した取り組みだけでなく、新たな取り組み方法を模索していかなければならない時期に来ているのではないかと。また、長らく続いた新型コロナウイルス感染症の影響もあり、児童相互、及び児童と教師の関わりの希薄さが学校生活での児童の様子にも影響を与えている。様々な課題を抱えた児童が安心して過ごし、学べる場としての学校の役割は今後さらに重要になってくると考えられる。

学校は児童にとって安全安心で魅力的な場でなければならない。また、児童一人一人の可能性を最大限に伸ばすことを目標に教育活動を行っていくことが、よりよい学校づくりの基盤となっていこう。学校長が本年度のグランドデザインの中で「教育の目指すべきゴール」として示す『持続可能な社会』の創り手を育成する＝『一人も置き去りにしない教育』の実現のためには、子ども第一で教育活動に当たる必要がある。私たち教職員一人一人が「子どもたちが主体的に参加し、楽しさを感じ、わかったと実感できる授業づくり」「相手を大切に思う心」を「自然に表現できる」子どもの育成」「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成の意識化、共有化、日常化」「基本的習慣の確立」「自己管理能力の育成」という具体的な取り組みを念頭に、保護者や地域住民の方々との連携・協働しながら児童の教育を行って

いきたい。そのために大切なことは、学校評価の中で明らかになった課題について、教職員が自分事として課題を改善する方法を考え、手立てを講じていくことである。教職員一人一人が自己の課題と向き合い、課題解決の方策を考え取り組む機会を設けることで、よりよい学校づくりを積極的に推進していきたい。